

## 十七 詩のように書かれた哲学

今年の旅をしたこともあつてあわただしく半年が過ぎた。詩集を手にすることもなかつたので、詩のように書かれた書物を買ってみた。新刊を告げる広告で見た『人はなぜ記号に従属するのか』という表題に、現代の人間が置かれている状態から抜け出す道を解き明かしてくれる、と期待したのである。なにしろ著者は、二十世紀後半のフランスの有名な哲学者F・ガタリなのだから。もつとも、以前にかじつてみて、その著作は歯が立たないことを知っていたのだが。

この書物でも、シニフィアンの記号機械、集合的装備、リゾームなどという言葉が出て来る。浦の苦屋の老夫は、この言葉はこういう意味らしいと一巡り回り道をして、さらに主語・述語がつくる文が何を主張しているのかを、もう一度たどどしく考える。どうしても、一文一文を輪郭のはっきりした議論として理解することは難しい。あいまに判つたようなつもりになって読み進むことになる。というわけで、前回と同じく、この人の書く文章は立ち止まりながらでないとい読み進めないヨーロッパの近代詩に似ている、とい

感想をもった。フランスで近代的な思索への端緒を拓いたモンテーニュは、詩を書く人が多いがそれはたやすい道だ、ほんとうは詩を読むことの方が力の要る、とり組むに値する行為だと考えた。そのフランスで、読むことのやさしくない「詩」で思索を表現しようとする人たちが現われたのは、偶然ではないのかもしれない。

一言で説明するのが困難な比喩的な言葉を骨格とする文をつくり、それらの文を連ねて象徴的な詩のように記述して哲学することが、二十世紀後半のフランスで一つの流行になり、その代表者ともいえるのが、コンピを組んだG・ドゥルーズとガタリだったらしい。その立場は前衛的なもので、現代の状況を批判して、それを変えたいと望んでいる、ということは老夫にも理解できる。この書物の原題という「漏出線——もう一つの可能な世界に向かつて」からも感得できる。しかし、その表題にすでに漏出線(逃走線)というようなやっかいな言葉が現われているのである。

そのような思考法・叙述法は、フランスだけのことではなく、ポスト・モダンの時代になつたと考えられた当時の世界で、先端を行こうとする思索者のあいだに広まつた。日本でも頭の切れる人たちがとり入れ、それぞれに議論を展開したようだ。初めは詩に現われるような象徴的だった言葉も、使われていくうちに一定の理解に至ったのかもしれない。

それらの言葉がアクティブに行き交っていた時代から三十年も経って、ガタリの当時の著作が新たに発刊されたのである。著者の議論に長くつきあつてよく理解した訳者は、この書物で、できるだけ分かりやすい訳文を心がけているように感じられる。それでも、ほとんどの文章と議論が必ずしも平明な論理で展開されているわけではないから、すんなりと理解するのはやはり難しい。今回も消化不良を起こして食欲がそがれ、第一部だけを読んで中断した。

負け惜しみで考えてみれば、一九九〇年代に起きたソーカル事件が想い出される。米国の物理学者A・ソーカルが、ポスト・モダンの論者たちに人気の雑誌に一つの論考を投稿した。じつはソーカルは、当時流行の衛学的な議論の仕方を批判するために、彼らの筆法に倣って科学用語を多用しながらでたらめな文章をでっち上げたのである。ところが、雑誌の編集者はそれを見抜けず、ポスト・モダンの論者たちを支援する論文として掲載してしまった。ソーカルは、『知の欺瞞』という書物で全面的な批判を展開した。科学用語を正しく理解せず意味不明な文章をつくることを批判したのだが、当然、思想を明瞭でない言葉づかいで記述することにも反省が及ぶ。『知の欺瞞』は、ドゥルーズとガタリも批判の対象とした。論理的に思考し記述しなければならぬ物理学者には、ポスト・モダンの論者たちに流行した明晰でない書きぶりが学問的でないと見えたのである。ガタリの哲学

的な「詩」が、浦の苦屋の老夫だけに難解だったわけではない。

しかしながら、頭がよいだけでなく世の中をよくしたいと考えた善意の思想家が、無駄な思索にふけていたとするのは、見当違いということになるだろう。この書物に薰習されてみれば、近代社会が長く続いてきた結果、複雑にからまりあつて手をつけようがないほど捉えにくくなった現代の状況を、解きほぐそうとしているのだと判る。門外漢にも、その批判は広い事柄にわたり、鋭く深いように感じられる。現代の経済・社会・政治をおおって人間の活動を抑圧する体制・制度を撃つだけでなく、既存の思想や思考法までも問題にして、人間を解き放つ道を探しているのだと思う。それが、「人はなぜ記号に従属するのか」という日本語表題が選ばれた理由だろう。

世には、経済活動を活発にするために可能なすべてを実行し、大胆な諸改革を行ないバラ色の未来をつくる、というような「聞こえのよい」言い方があふれている。先進諸国の経済は本当のところどうなっているのか、すでに「改革」が続いたのに格差が広がっているのはなぜか、などの疑問が公然と語られることは少ない。状況は、構造として社会に埋めこまれているばかりでなく、それを支える言語など記号的なすべてのものを支配して、われわれの思考そのものが現状を変更できなくしている、と説いているのだと思う。

けれどもやはり、中心的な論点を誰もがすぐに理解できるようには書かれていない。これでは、多くの人々が聞き耳を立てるほど影響を与えることはできない。三十年以上経つて、現在も世をおおっている体制と文化が本質を変えずに続く中、批判はあふれる情報にからみとられて底にたまるだけで、力を発揮できていない。ガタリの書物を離れて考えてみても、資本主義経済がターニング・ポイントを過ぎた一九七〇年代から、あらゆる種類の言説が状況を批判したはずだけでも、それを改善しようとする動きはほとんど成功してこなかった。その推移をぼんやりと傍観してきた老人にも、今起きている事態はたいへんもどかしい。

老夫にできることは、もっと長い歴史をふり返ってみることである。歴史は理念が成就していく過程ではない。じつのところ、歴史の実際の展開は、あらゆる見苦しいことが起きる、まことにとほうもないものであった。それでも紆余曲折を経ながら、歴史に一つの進展のようなものがあつた、より多くの人間が各自の可能性を追求できるようになつてきた、というふうに見える。これは希望的観測なのだろうか。

その動因を社会の外に求めることはできない。人間の社会は、ほかの動物の社会と違う。葉切りアリがつくる社会は、ほとんどDNAに埋めこまれた本能によるけれども、人間は

本能以上の行動をする。文化によってあるいは言葉によって考えて行動を選ぶ。人間の考え方は、社会のあり方に強く影響されている一方で、社会のあり方を変える。過去をふり返ると、この相互作用は長い間にあと戻りできないほど社会を変えた。それをわれわれは歴史と呼んでいるのである。たとえば、長かった封建体制は、ほとんどすべての人間の言動と一体になっていて、考え方は後世まで尾を引いたのに、じつにゆっくりと別のものに移行した。ガタリの言うように、現在考え方まで資本主義体制に組みこまれているが、それもいつか終わる時が来るのだ。

すでに資本主義体制の終焉を見越している少数の人たちがいる。その議論に影響された感想が、この雑記帳のはしばしに登場している。ゆるやかだが押しとどめることのできない社会の変化が、二十世紀後半からのさまざまな考察・議論を乗り越えていくだろう。その大きなうねりにもまれながら、人は底に埋もれたそれらの言説を思い起こすことになるのだろう。